

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-26

自著を語る：『環境と社会(ブックガイドシリーズ 基本の30冊)』[西城戸誠・船戸修一編]

西城戸, 誠 / Nishikido, Makoto

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

40

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

2013-06

【読書案内 — 環境を学ぶために —】

自著を語る： 『環境と社会（ブックガイドシリーズ 基本の30冊）』

西城戸 誠

（『環境と社会（ブックガイドシリーズ 基本の30冊）』（西城戸誠・船戸修一編／
人文書院）2012年

はじめに

この小稿の目的は、筆者が共同して編集し、2012年末に上梓した『環境と社会（ブックガイドシリーズ 基本の30冊）』（人文書院）が、どのような意図で編集され、読者にどのように読んでもらいたいのか、という点を紹介することである。「ブックガイド」という言葉がタイトルにも含まれているように、本書は初学者に「環境と社会」に関わる文献を紹介することを目的としている。本書を手にとろうとした人の中には、講義やゼミでレポートを課せられ、「手っ取り早く」書籍の内容を理解し、そして中には、あたかも自分が考えたかのように、それぞれの書籍に対する議論を「参考」にする人もいるかもしれない。後者のような行為は、引用がなければ明らかな盗用、剽窃であり、断じて行ってはならないが、本書は、このような「怠慢な学生」が「簡単に参考にする」ことはできないと断言しておこう（このように書くとも本書が売れなくなってしまう、出版社に迷惑がかかってしまう可能性があるのだが）。

このように断言したにはいくつかの理由がある。本書で紹介されている30冊の書籍は、12名の執筆者全員で長い間、協議して選んだが、削るに削れない作品も多く、30冊を選ぶ作業は予想以上に難航した。そのため、取り上げた30冊以外に関連した書籍についても言及してあり、1冊の本の紹介にとどまらない

い奥深さがある。何より、それぞれの執筆者が、それぞれの専門分野を背景にして、各個人の思い入れの中で書かれた論考である。したがって、レポートで安易な引用をすることは容易ではない。それだけ書籍紹介の内容は、非常に濃密なものになっている。手前味噌で恐縮だが、「環境と社会」の関係を考えるための視点、さまざまなイシューを網羅する形で編集されている本書は、初学者だけでなく、より「環境と社会」に関する勉強をしたい方にも役に立つと考えている。

「環境と社会」というテーマに関して

さて、筆者は法政大学人間環境学部に所属しているが、この学部のコンセプトは、「環境問題」の原因を作り出している人間の営為やあり方について考えることをベースに、文系の立場から「持続可能な社会」づくりに向けた方策を探求することをめざす（法政大学ホームページより引用）というものである。実は本書も同様の立ち位置から「環境」や「環境問題」を考えており、「環境を学ぶ＝自然科学」という未だなお強い固定観念に対して、「社会」から考える「環境」というスタンスの重要性を主張している。以下、詳述しよう。

周知の通り、「環境」という言葉の意味は多義的であり、ある人は、自然豊かなさまざまな景色を思い浮かべたり、漠然と「緑」といったイメージを持ったりするだろう。また、「環境問題」についても、地球温暖化をはじめとした地球環境問題、福島第一原発事故による放射線物質による汚染の問題だけではなく、大気汚染、ゴミやリサイクルなど、都市部に住む住民の生活上の問題、貴重な自然や身近な自然の保護、保全を巡った問題や、水俣病、イタイイタイ病、新潟水俣病、四日市ぜんそくなどの「公害」の歴史を想起する人もいるだろう。

近年、このような「環境問題」の原因、解決策を探る学問領域に対して、社会科学や人文科学からのアプローチが盛んになってはいるものの、依然、「環境を学ぶ＝自然科学」という意識は強い。例えば「環境問題は、水や大気の問題だ」と物理的な自然の問題に還元する言説も一部では根強く存在する。しかしながら、水質汚濁や大気汚染といった問題は、水質や大気といった物理的な問題に還元することでは解決はされず、問題の原因となっている社会的背景を議論しなければならない。実はこのような硬直化した環境問題のイメージが、問題解決の思考を狭くし、解決を困難にしていることは多い。

もう一つ仮定の事例を挙げてみよう。空港近くに住む住民は、日々、航空機

の離発着に伴う騒音に悩んでいる。一方、国道近くに住む住民が、暴走族による騒音に悩んでいる。今、2つの地域でそれぞれの騒音に対する住民の反対運動が立ち上がったとしよう。そして、この反対運動を主導した住民の周囲の評価を想像して欲しい。後者の騒音問題に対しては「よくやってくれた」という反応が多いのに対して、前者の騒音問題に関して、騒音に悩む住民からの賛同があるものの、航空機という公共交通のためだから仕方がないという判断から、空港の近くに住む住民のエゴだという批判もあるだろう。これらの批判の正統性についてはここでは問わない。重要な点は、同様の「騒音問題」でありながらも、その対応に関しては評価が分かれるという事実である。空港の騒音問題の方が毎日、定期的に発生し、航空機の離発着がなくなる限り、根本的な問題の解決ができないにもかかわらず、暴走族の騒音問題と比較すると、社会的評価が異なることなのである。つまり、環境問題に対する物理的な評価と、社会的な評価は異なることがしばしばであり、問題の解決のためには、問題自体の社会的側面に注目し、環境と社会の接点から問題を考えていく視点、－自然環境と同時に、人間社会の営みも同時に議論する視点－が必要であるといえるだろう。それは、福島第一原発事故直後に発せられた「ただちに健康に影響が出るものではない」という説明に対して不安を抱く人々が多かったことを考えてみてもよい。専門家による「科学的な知見」のみでは、安全の定義だけではなく、「安全さ」に関する納得を得ることはできない。科学による知見と社会的に要求されている答えには、「ズレ」があることがしばしばある。だからこそ「環境と社会」というテーマが重要になるのである。

本書の内容

本書は、上記のような問題関心から、「環境と社会」を考える上で、学術的にも実践的にも重要な視点を提供している著作30冊を選んだ。選定にあたっては、「環境」に関わるさまざまな 이슈を網羅することを心がけたが、基本的な考え方は、「どのような環境を」「誰が（誰にとって）」「どのように」考えるか（守るか）という3つの点からなる。

まず、「どのような環境を」という点については、リスク（危険度という意味と、予想通りにならない可能性という意味）と、ウェルビーイング（個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること）という2つの観点を設定し、それぞれのありようや、その状態に対する人々の対応

についての論考を選出した。本書の第1部「リスクから考える」では、社会が内包するリスクや、環境問題として顕在化してしまったリスクに対して、私たち自身や社会が、どのような対応をし、今後、どのように対応すればよいのかという観点からの5作品が紹介されている。また、第2部「失われた環境」では、さまざまな環境破壊が発生したことに対して、被害を受けた住民、問題に関わる組織などの動きを、多様なかたちで捉えることによって、それぞれの環境問題の本質に迫った6作品が紹介されている。さらに、第3部「環境を守る」では、「環境」自体や、環境を「守る」という思想自体を問う作品と、その環境を守るという思想が、どのような実践と接合しうるのかという観点から選ばれた6作品が並ぶ。

次に「誰が（誰にとって）」という観点は、換言すれば、当事者性という観点から環境や環境問題を考えるということである。本書第4部「当事者性から考える」では、環境や環境問題が「誰にとっての」問題であるのか、その当事者という観点から、環境と社会の関わりに関して論じた5作品が紹介されている。

最後に「どのように考える（守る）か」という点は、環境問題のそれぞれのイシューにおいて、環境的な公正や正義の担保を巡った議論であり、第5部「正義と公正」において8作品が紹介されている。

もっとも、3つの観点を5つのパートに分けて紹介してあるが、書籍によっては、重複する観点を内包するものもあり、作品の内容の紹介の力点の置き方の違いによるものである。読者には多様な読み方を期待したいと思う。

おわりに

繰り返し述べるように、本書は、選択した30冊以外にも関連した書籍が紹介されており、さらに選んだ書籍はやや「玄人好みのラインナップ」になっているため、初学者にはやや難しいという印象があるかもしれない。しかし、本書は、「環境と社会」を考える上で、不可欠な書籍がラインナップされているといっても過言ではない。本書を手にとった方は、自分が関心を持った書籍の紹介箇所を読み、さらに関連文献を読み進めたり、本書を通読することで、自分の関心がどこにあるのかを確認したりすることもできる。本書が、2011.3.11以後、私たちが生きる世界を捉え直し、新たな歩みを踏み出すためのステップになることを期待してやまない。

付記

本稿は、筆者が執筆した、『環境と社会（ブックガイドシリーズ 基本の30冊）』人文書院（2012年）の「はじめに」の内容を再構成したものである。

また、本書のもう一人の編者（船戸修一氏）は、法政大学人間環境学部の兼任講師でもある。